

きた はら ひろ お
北 原 博 雄

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第68号

学位授与年月日 平成11年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)
日本語学専攻

学位論文題目 日本語動詞句の研究

論文審査委員 (主査)
教授 齋藤倫明 教授 村上雅孝
教授 平野日出征
助教授 小林隆

論文内容の要旨

本論文では、数量表現、ニ格名詞句、マデ格名詞句、対格名詞句と動詞句との共起関係に基づいて、動詞句の限界性(Telicity)というアスペクチュアルな性質について考察した。本論文の構成は次の通りである。

はじめに

第I部 数量詞の文法

第1章 連体修飾の数量詞と連用修飾の数量詞

第2章 副詞句としての個体数量詞と内容数量詞

—個体数量詞と頻度数量詞の共通性及び内容数量詞と期間数量詞の共通性—

第3章 数量詞の先行詞が現れる統語的階層—非対格性の仮説からの検討—

第4章 数量詞が表す数量と先行詞が現れる統語的階層との関係

第II部 動詞句の限界性

第5章 移動動詞と共起するニ格名詞句の意味役割－着点と方向－

第6章 移動動詞と共起するニ格名詞句とマデ格名詞句

－数量表現との共起関係に基づいた語彙意味論的考察－

第7章 非限界動詞と共起する対格名詞句と動詞句の限界性との関係

おわりに

第I部は、「3冊」「100ページ」のように、数詞（「3」「100」）と助数詞（「冊」「ページ」）から構成される数量詞（numeral quantifier）を中心とする考察である。数量詞は、様々な統語的位置に現れるが、第1章は、(1a)(1b)の下線部の位置に現れるような数量詞が表す数量は何か、についての考察である。

(1) a. 5本の鉛筆を買った b. 鉛筆を5本買った

(1a)(1b)の「鉛筆」を先行詞と呼び、(1a)の「5本(の)」のように先行詞を連体修飾している数量詞を連体Qと呼び、(1b)の「5本」のように、先行詞をとり、かつ、述語を連用修飾している数量詞を連用Qと呼ぶことにする。QはQuantifier（数量詞）の略である。

(1a)(1b)の間には意味の違いは認めにくいだが、(2a)(2b)の間には意味の違いが明確に認められる。

(2) a. 10cmの鉛筆を削った b. 鉛筆を10cm削った

(1a)(1b)のペアと(2a)(2b)のペアは、意味の違いの有無を考えなければ、連体Qと連用Qとの置き換えが可能であるものである。しかし、そのような置き換えができない、あるいはしにくいものも存在する。

(3) a. 4000ccの車を買った b. *車を4000cc買った

(4) a. ? *2人の子供が多い b. 子供が2人多い

(1)－(4)を統一的に説明するためには、連体Qについては(5)のようなことを、連用Qについては(6)のようなことを言う必要がある。

(5) 連体Qは先行詞の指示対象の数量を表す。

(6) A. 述語動詞が変化動詞及び動作動詞である場合、連用Qは、動詞句が表す事態の終了時に達成される、先行詞の指示対象に関わる数量を表す。

B. 連用Qは、述語動詞に限定された、先行詞の指示対象の数量を表す。

(6B)は、「ある」などの状態動詞を含めた場合の記述である。(5)は、連体Qが、その修飾対象である先行詞の指示対象だけに関わる数量を表すということであり、(6)は、連用Qが、先行詞の指示対象に関わる数量だけでなく、その修飾対象である述語動詞に関わる数量も表すということであるというように、(5)(6)は基本的な統語論で説明可能なことである。

(6A)のように、動詞句が表す事態の終了時に達成される数量を達成量と呼ぶことにする。(1b)の「買う」は動作動詞であり、(2b)の「削る」は変化動詞であるが、(1b)(2b)の連用Qはそれぞれ、「鉛筆を買う」「鉛筆を削る」という事態の終了時に達成される「鉛筆」についての数量を表している。これが達成量である。

第2章から第4章までは連用Qについての考察である。第2章では、(7a)の「3冊」と(7b)の「50ページ」のような連用Qと、(8a)の「5回」のような頻度数量詞、そして、(8b)の「5時間」のような期間数量詞のそれぞれについて、副詞句としての性質を考えた。

(7)a. 太郎が本を3冊読んだ b. 太郎が本を50ページ読んだ

(8)a. 太郎が花子と5回会った b. 太郎が花子と5時間会った

(7a)の「3冊」と(7b)の「50ページ」は、(6B)から、ともに「読んだ本」の数量を表していると言えるが、「読んだ本」については、前者は1冊1冊、個別的、離散的に計量しているのに対して、後者はひとまとまりとしてまるごと計量していると言える。このような計量方法の違いに着目して、(7a)の「3冊」を個体数量詞と呼び、(7b)の「50ページ」を内容数量詞と呼んだ。(8a)の「5回」のような頻度数量詞は、動詞句が表す事態を1回1回、個別的に計算していると言えるから個体数量的な計量をするものであり、(8b)の「5時間」のような期間数量詞は、動詞句が表す事態をひとまとまりとしてまるごと計量しているから内容数量的な計量をするものであると言える。さらに、個体数量詞と頻度数量詞は、たとえば(9a)(9b)の間で互いに他を含意する場合があること、

(9)a. ホームランを65本打った b. ホームランを65回打った

そして、内容数量詞と期間数量詞は、「*豚を200kg殺す」「*豚を1時間殺す」のように「殺す」のような限界動詞と共起しにくい、「豚を5トン殺す」「1時間次々と豚を殺す」のように計量対象の数量がある程度多いと読める場合には限界動詞と共起することができることを述べた(限界動詞については後述する)。これらも計算方法という点で、個体数量詞と頻度数量詞との間、そして、内容数量詞と期間数量詞との間に共通点があるという考え方を支持する。また、数量詞を構成する助数詞を見ても、内容数量詞と期間数量詞は、“1m=100cm”、“1時間=60分”のような置き換えはできない(e.g.)冊・回という点も上のように二分することの妥当性を支持する。

個体数量詞と内容数量詞が共起している場合、内容数量詞が達成量を表するためには、(10a)のように内容数量詞は個体数量詞よりも動詞に近い位置に現れなければならないと言える。なぜなら、(10b)は、トータルで「枝」が150cm折れたとも読めるように、「50cm」が分配量を表しているとも読めるからである。

(10)a. 枝が3本50cm折れた b. ?枝が50cm3本折れた

そして、(11)から、個体数量詞よりも内容数量詞の方が動詞との共起制限が強いと言える。

(11)a. 本を5冊 読む／見つける／積み上げる／捨てる

b. 本を5ページ 読む／*見つける／*積み上げる／*捨てる

動詞との共起制限が強い副詞句ほど動詞に近い位置に現れるから、(10)(11)より、達成量を表す内容数量詞は個体数量詞よりも動詞に近い位置に現れるとすることができる。

第3章と第4章は、非対格性の仮説による動詞の3分類に基づいた考察である。この仮説は、自動詞を非能格動詞と非対格動詞とに二分するものである。この二分は、GB理論の枠組みでは、(12a)(12b)のように、表層主語が基底生成される位置の違いによって行われる。以下関係する部分のD構造のみを示すことにする。

(12)a. ベィリーが走る : [vp ベィリー [v'[v 走る]]] (非能格動詞)

b. 枝が折れる : [vp [v'[[NP 枝] [v 折れる]]]] (非対格動詞)

c. 剛が枝を折る : [vp 剛 [v'[[NP 枝] [v 折る]]]] (他動詞)

非能格動詞の主語は、(12a)の「ベィリー」のように、他動詞の主語 ((12c)の「剛」) が基底生成される位置と同じ位置に基底生成される。そして、非対格動詞の主語は、(12b)の「枝」のように他動詞の目的語 ((12c)の「枝」) が基底生成される位置と同じ位置に基底生成される。まず、(12a)–(12c)のような動詞の3分類を利用して、連用Qの先行詞が現れる統語的環境について記述する。個体数量詞は、他動詞の主語 ((13a)の「猿」)、他動詞の目的語 ((13b)の「枝」)、非能格動詞の主語 ((13c)の「やくざ」)、そして、非対格動詞の主語 ((13d)の「枝」) を先行詞とする。

(13)a. 猿_iが4匹_i石を投げた b. 太郎が枝_iを3本_i折った

c. やくざ_iが3人_i暴れた d. 枝_iが5本_i折れた

それに対して、内容数量詞は、(14b)(14d)のように他動詞の目的語と非対格動詞の主語 (以下、両者を内項と呼ぶ) を先行詞にすることばできるが、(14a)(14c)のように他動詞の主語と非能格動詞の主語 (以下、両者を外項と呼ぶ) を先行詞にすることはできない。

(14)a. *猿_iが5kg_i石を投げた b. 太郎が枝_iを30cm_i折った

c. *やくざ_iが65kg_i暴れた d. 枝_iが30cm_i折れた

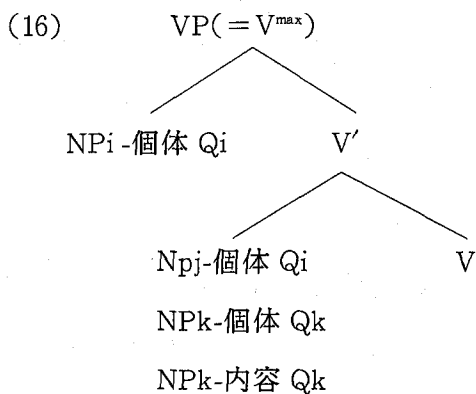
次に、外項及び内項を先行詞としてとる連用Qが表す数量について述べる。以下は述語動詞が動作動詞及び変化動詞である場合についてのものである。まず、外項を先行詞としてとる連用Qについて。「投げる」も「暴れる」も動作動詞だから、達成量の解釈である(6A)は(13a)(13c)についても成立するはずであるが、(6A)の解釈は、外項を先行詞としてとる連用Qについては成立しない。たとえば、(13a)の「4匹」は、「石を投げた猿」の数量を表すと解釈することができるように(6B)の解釈は成立するが、「石を投げる」という事態の終了時に達成され

る「猿」の数量を表すというような達成量の解釈は成立しない（あるいは成立しにくい）。あえて達成量の解釈をしようとすれば、“石を投げる猿が予め4匹決まっています、その猿が4匹ともすべて石を投げ終えた”という解釈が可能であるような先行文脈の支えが必要である。このように外項を先行詞としてとる連用Qは達成量の解釈ができないのである。これは、外項を先行詞としてとる連用Qが、動詞句の表す事態の終了時というアスペクチュアルな側面とは関わらない、ということを示しているのである。次に、内項を先行詞としてとる内容数量詞は(14b)(14d)のようにつねに達成量を表すと言える。ただし、内容数量詞は次のような内項を先行詞としてとれない場合もある。

(15)a. 友人を 4人 / *60kg 待つ b. 花が 2つ / *10g / *3cm 咲いた

(15a)の「4人」は、内項を先行詞としてとる連用Qであるが、達成量を表していない。このように達成量を表せない場合、内容数量詞は現れることができないのである。(15b)の「2つ」は達成量を表しているが、この構造に内容数量詞が現れないのは、「咲いた花」を計量する場合、重さ、長さなどの内容数量で計測しないのが普通であるというような語用論的な制約によるのである。(15a)(15b)から、内項に限ってみても、個体数量詞は内容数量詞よりも先行詞としてとれる場合が多いということも言える。

以上の考察を次に挙げる樹形図を用いてまとめよう。(16)では、“NPi”が外項に相当し、



“NPj”と“Npk”が内項に相当する。“NPj”は個体数量詞だけがとれる先行詞を指し、“Npk”は個体数量詞も内容数量詞もとれる先行詞を指している。(16)より、Vから直接的にθ役割を付与される名詞句の一部すなわち“Npk”だけが内容数量詞の先行詞になるのに対して、個体数量詞は、“NPj”、“Npk”のようにVから直接的にθ役割を付与されている名詞句を先行詞にすることもできるし、“NPi”のように間接的にθ役割を付与される名詞句を先行詞にすることもできる。そして、(16)で動詞Vが動作動詞及び変化動詞である場合、“Npk”を先行詞としてとっている連用Qが達成量を表すものであるとすることができる。

第II部では動詞句の限界性(Telicity)についての考察を行った。動詞は限界性から限界動詞(telic verb)と非限界動詞(atelic verb)に二分される。限界動詞とは、予め語彙部門で決定されている限界点をもつ動詞である。たとえば、「割る」は割れる時点という限界点をもつから限界動詞である。限界点に到達しないと割ったことにはならない。それに対して、非限界動詞は、予め語彙部門で決定されている限界点をもつ動詞である。たとえば、「割る」は割れ

る時点という限界点をもつから限界動詞である。限界点に到達しないと割ったことにはならない。それに対して、非限界動詞は、予め語彙部門で決定された限界点をもたない動詞である。たとえば、「歩く」は10m歩いても10km歩いても一旦歩き始めれば歩いたと言えるから限界点をもたない動詞すなわち非限界動詞である。以上は、動詞という語彙部門のレベルにおける限界性についてのことであるが、第Ⅱ部で考察する動詞句（あるいは節）レベルの限界性は、動詞レベルの限界性からだけでは決定することができず、動詞句のアスペクトすなわちアスペクチュアリティーを決定する構成要素をすべて計算に入れなければならないのである。

第5章では、動詞句の限界性から、移動動詞と共起している二格名詞の意味役割が着点と方向に適切に二分することができることを述べた。移動動詞とは、「行く」「入る」のような位置変化動詞と「走る」「泳ぐ」のような移動様態動詞を一括したものである。位置変化動詞は限界動詞に対応し、移動様態動詞は非限界動詞に対応することになる。

(17a)(17b)を見てみよう。

(17)a. 花子が東銀座に行った b. 花子が東銀座の方に／北に 行った

(17a)は、事態終了時に移動体「花子」が「東銀座」に存在していなければ成立したことにはならないから Telic な動詞句である。つまり、「東銀座」は、(17a)が表す事態の限界点を明示化している。このような二格名詞句の意味役割を着点と呼ぶ。それに対して、(17b)は、事態終了時に移動体「たか子」が事態開始以前よりも少しでも「東銀座」寄りにあるいは「北」寄りに移動していれば成立すると言えるから Atelic な動詞句である。このように、事態の限界点を明示化しない二格名詞句は、移動の方向を表していると言えるから、そのような二格名詞句の意味役割を方向と呼ぶ。以上のことから次のようなことが言える。

- (18) i. 着点二格名詞句は事態の限界点を明示化する。
ii. 方向二格名詞句は事態の限界点を明示化しない。

次に、位置変化量を表す数量詞（以下、位置変化量 Q と呼ぶ）について見る。位置変化量 Q は、たとえば(19)の「40km」のように達成量を表している。

(19) 瀬古が40km走った

(19)では、40km 走り終えた地点が限界点であると言えるから、次のようなことが言える。

(20) 位置変化量 Q は事態の限界点を明示化する。

(19)の「走る」は非限界動詞であるが、位置変化量 Q からの修飾を受けることにより、「40 km 走っ(た)」が Telic な動詞句になる。これと同じことが、第Ⅰ部で考察した連用 Q についても言える。動作動詞は非限界動詞に分類されるが、たとえば「本を 5冊／100ページ 読んだ」の「5冊」「100ページ」は、「本を読ん(だ)」という事態の限界点を明示化するため Telic な動詞句になる。つまり、達成量を表す連用 Q が存在する非限界動詞句は、連用 Q が限

界点を明示化するから Telic な動詞句になるということである。次の例を見てみよう。

- (21)a. * 駅に100m 行った b. 駅の方に／西に 100m 行った

動詞句が表す事態に対する限界点の明示化は1回しか言えないと仮定すれば、(21a)(21b)の間の適格性の違いは、(21a)のニ格名詞句は着点ニ格名詞句であり、(21b)のニ格名詞句は方向ニ格名詞句であるという点に起因していると言える。つまり、(18i)(20)から、(21a)の表す事態に対する限界点の明示化は、着点ニ格名詞句と位置変化量 Q から2回行われているため(21a)は不適格になるのであり、(18ii)(20)から、(21b)の表す事態に対する限界点の明示化は位置変化量 Q から1回だけ行われているため(21b)は適格になるのである。(21)は位置変化動詞の例であったが、移動様態動詞でも同様である。

- (22)a. * 梅子が由比ヶ浜に500m 歩いた
 b. 梅子が 西に／由比ヶ浜方面に500m 歩いた

(22b)が適格であるのは、限界点の明示化が位置変化量 Q から1回だけ行われているからである。(22a)が不適格である理由は「歩く」が着点ニ格名詞句を選択しないということの説明することができる。

以上のように、移動動詞と共起するニ格名詞句の意味役割は、位置変化量 Q と共起すれば方向であり、位置変化量 Q と共起しなければ着点であると言える。ここから限界性を変更する句が他に存在する場合、方向ニ格名詞句が存在する移動動詞句は Atelic な動詞句であり、着点ニ格名詞句が存在する移動動詞句は Telic な動詞句であると言える。そして、「近づく」「進む」のように方向ニ格名詞句を選択する動詞が主要部である動詞句も Atelic な動詞句であると言える。

第6章では、「家まで走る」「家に入った」のような移動動詞と共起する着点ニ格名詞句とマデ格名詞句の異同について語彙意味論的に考察した。これも限界性からの考察である。移動様態動詞及び位置変化動詞の語彙概念構造(以下、LCSと呼ぶ)はそれぞれ(23a)(23b)である。

- (23)a. [x ACT] b. [BECOME [y BE AT z]]

(23)で、ACTは過程を表し、BECOMEは変化を表し、BE ATは、(結果)状態を表す意味述語である。(23a)は「xが何らかの過程を伴う動作をする」という概念を表し、(23b)は「yがzに存在するようになる」という概念を表している。移動様態動詞は(24a)のように着点ニ格名詞句とは共起しないが、(24b)のようにマデ格名詞句とは共起する。それに対し、位置変化動詞は(25a)(25b)のようにどちらとも共起する場合と、(26a)のように着点ニ格名詞句とは共起するが、(26b)のようにマデ格名詞句とは共起しにくい場合がある。

- (24)a. ? * 駅に歩いた b. 駅まで歩いた
(25)a. 駅に行った b. 駅まで行った

(26)a. 駅に着いた b. ?? 駅まで着いた

(24b)の「駅まで」は、着点を表しているという限界点読みと、必ずしも駅に着いていなくてもいいという到達範囲読みがあるが、(25b)の「駅まで」は限界点読みだけである。

「1時間で」のようなものを「期間 Q デ」と呼ぶことにする。(24b)(25a)(25b)(26a)は次のように期間 Q デと共起する。

(27) 駅まで1時間歩いた

(28)a. 駅に1時間で行った b. 駅まで1時間で行った c. 駅に1時間で着いた

(27)のマデ格名詞句は限界点読みだけであるのだが、この理由を LCS で説明すると以下のようになる。まず、位置変化動詞について述べる。着点ニ格名詞句は項であり(23b)の AT z に対応する。(23b)の AT はニで実現するものであるから、(23b)はマデ格名詞句と共起している(28b)の「行く」の LCS ではない。限界点読みのマデ格名詞句と着点ニ格との違いは、前者は過程を表しつつ限界点を示すのに対し、後者は点的に限界点を示すという点である。ここでは、(28b)の「行く」の LCS は(23b)の左側に(23a)を合成した(29)であり、「1時間で」は(29)の BECOME を修飾していると考えられる。

(29) [yi ACT] CONTROL [BECOME [yi BE AT z]]

1 時間で

(29)で AT がマデで実現するのは、構造上 AT が ACT の作用域の中に存在するからである。次に、移動様態動詞について。(27b)のマデ格名詞句は限界点読みだけであるから、LCS に AT z が必要である。したがって、(27b)の「歩く」の LCS は、(23a)の右側に(23b)を合成した(30)であり、「1時間で」は(30)の BECOME を修飾すると言える。

(30) [xi ACT] CONTROL [BECOME [xi BE AT z]]

1 時間で

(30)で AT がマデで実現する理由は(29)の AT がマデで実現する理由と同じである。移動様態と共起するマデ格名詞句は、副詞句（あるいは付加詞）あるいは後置詞句であると一般に言われるが、期間 Q デと共起すると(30)の AT z に相当する、つまり、項であることになる。付加詞や後置詞句とは異なり、項は文成立に必須の句である。これは、(27)からマデ格名詞句を除いた「1時間で歩いた」は不自然であり、(27)は適格であるという点からも支持される。「1時間で歩いた」の「歩く」の LCS が(23a)であるとすれば、この LCS には期間 Q デが修飾する BECOME が存在しないため、「1時間で歩いた」は不適格になるのである。「1時間で歩いた」にマデ格名詞句を挿入するということは、(23a)に LCS の合成をかけて(30)を作ることである。副詞句あるいは後置詞句であるマデ格名詞句は、到達範囲読みに対応し、限界点を示すものではないから、(23a)の ACT を修飾するものであると言える。

以上の考察を簡単にまとめて示すと次のようになる。

(31) x が z ニ限界 V

↓ (限界動詞句の非限界動詞句への近づき)

x が z マデ V (V ; 限界 V / 非限界 V . マデ; 限界点読み)

↑ (非限界動詞句の限界動詞句への近づき)

x が非限界 $V \rightarrow x$ が z マデ非限界 V (マデ; 到達範囲読み)

第7章では、移動様態動詞と共起する対格名詞句と非限界他動詞と共起する対格名詞句が、それらが存在する動詞句の限界性の変更、すなわち、Atelicな動詞句から Telicな動詞句への変更にどのように関与しているかについて、限界他動詞と共起する対格名詞句と対比して述べた。対格名詞句が指示的であるかどうか、及び、期間 Q デのような事態限定子からの修飾の有無、そして、対格名詞句が量化されているかどうか、といった点が、移動様態動詞句及び非限界他動詞句の限界性の変更と密接に関わるものであることを述べた。このように、動詞句のAspectすなわちAspekチュアリティーについて考える場合は、語彙部門レベルの考察ではすべてをカバーすることはできず、名詞句の指示性、修飾、量化といった統語論レベルの問題が関連してくるのである。

以上のように、本論文では、第I部で、先行詞を取り、かつ、動作動詞及び変化動詞を修飾する数量詞が達成量を表す場合—すなわち、事態をAspect限定し、限界点を供給する場合—について記述し、第II部では、位置変化量 Q 、ニ格名詞句・マデ格名詞句、対格名詞句、期間 Q デ、のそれぞれが動詞句の限界性とどのように関係するか、について考察した。また、本論文の考察から、名詞句の意味役割の決定に副詞句が関与することがあること、そして、名詞句が項であるか副詞句（あるいは後置詞句）であるかということの決定についても、副詞句が関与する（あるいは別の側面から言えばAspect構造が関与する）場合があることも明らかになった。これは、従来の研究における副詞句の扱いには見られない点である。

論文審査結果の要旨

本論文は、大きく「第I部 数量詞の文法」、「第II部 動詞句の限界性」の2部に分かれ、第I部が4章、第II部が3章の計7章からなっている。

「第1章 連体修飾の数量詞と連用修飾の数量詞」では、「5本の鉛筆を買った。」と「鉛筆を5本買った。」における連体修飾の数量詞「5本の」（「連体 Q 」と呼ぶ）と連用修飾の数量詞（「連用 Q 」と呼ぶ）「5本」の相違を取り上げ、前者は、「先行詞の指示対象の数量を表」

し（「先行詞」とは「鉛筆」を指す）、後者は、「述語動詞に限定された、先行詞の指示対象を表す」ことを論じるとともに、先行詞の指示対象の違いに応じ、数量詞を「個体数量詞」と「内容数量詞」とに二分した。なお、「動詞句が表す事態の終了時に達成される数量」を「達成量」と命名した。

「第2章 副詞句としての個体数量詞と内容数量詞」では、連用Qの個体数量詞は「1回、2回」のような「頻度数量詞」と、内容数量詞は「1時間、2時間」のような「期間数量詞」と、計量方法、助数詞の面からそれぞれ対応すると考えられることを示すとともに、個体数量詞と頻度数量詞との間で互いに他を含意する場合があること、また、内容数量詞の方が個体数量詞よりも述語動詞近くに現われやすくその分述語動詞との共起制限が強いこと、を論ずる。

「第3章 数量詞の先行詞が現れる統語的階層」では、「非対格性の仮説（Unaccusative Hypothesis）」に基づき連用Qの先行詞が現われる統語的位置について検討し、個体数量詞の場合は、他動詞目的語・非対格動詞主語（以上「内項」と呼ぶ）、および他動詞主語・非能格動詞主語（以上「外項」と呼ぶ）を先行詞として取ることができるが、内容数量詞の場合は、内項を先行詞にすることは出来るが外項を先行詞にすることはできないこと、ただし、連用Qが「位置変化量」を表わす内容先行詞として取らずしかも適格な場合が存在することを論ずる。

「第4章 数量詞が表す数量と先行詞が現れる統語的階層」では、外項を先行詞として取る数量詞（前述のごとく個体数量詞に限られる）が表わす数量は達成量ではなく、「事態に参加する先行詞の指示対象の数量」を表わすこと、内項を先行詞として取る内容数量詞は達成量を表わすが内項が「被影響対象名詞句」でなければならないことを述べ、その上で、規定上、達成量を表わすQは「動詞句が表す事態の『限界点』を明示化する」、すなわち「動詞句が表す事態を『アスペクト限定』する」と読み替えることを示し、改めて連用Qをアスペクト限定の観点から3種類に場合分けした。

「第5章 移動動詞と共起する二格名詞句の意味役割」では、移動動詞とは、「行く」「入る」のような「位置変化動詞」と「走る」「泳ぐ」のような「移動様態動詞」とを包含するが、前者は「限界動詞（telic verb）」、後者は「非限界動詞（atelic verb）」に対応するという基本的認識の下に、移動動詞と共起する二格名詞句には、事態の限界点を明示化する「着点二格名詞句」と明示化しない「方向二格名詞句」と2種類が存在すること、位置変化量を表す数量詞（「位置変化量Q」と呼ぶ）は事態の限界点を明示化するので、方向二格名詞句は位置変化量Qと共起するが着点二格名詞句は共起しないこと、を論ずる。

「第6章 移動動詞と共起する二格名詞句とマデ格名詞句」では、移動様態動詞と位置変化動詞の「語彙概念構造」を(a) [x ACT]、(b) [BECOME [y BE AT z]] とそれぞれ捉えた上で、それらがマデ格名詞句と共起する場合というのは、マデ格名詞句と着点二格名詞句との相

違が、前者は「過程を表しつつ限界点を示」し後者が「点的に限界点を示す」という点にあることを踏まえると、移動様態動詞の場合には上記(a)に(b)が合成され、位置変化動詞の場合には上記(b)に(a)が合成されて、いずれも構造上ATがACTの作用域の中に存在している場合であることを論ずる。

「第7章 非限界動詞と共起する対格名詞句と動詞句の限界性との関係」では、移動様態動詞、および「読む」や「押す」のような非限界動詞と共起する対格名詞句がそれらの存在する動詞句の限界性を変更することがある、という現象を指摘した上で、それがどういう場合に生じるのか、という問題を設定し、(1)対格名詞が指示的であるかどうか、(2)「期間Qテ」(ex. 「1時間で」)のような「事態限定詞」が有るかどうか、(3)対格名詞句が数量詞等で量化されているかどうか、といった点がそれらの動詞句の限界性の変更に密接に関わっていることを論ずる(ただし、(1)は(2)より優位であるとする)。

以上、本論文は、連体Qと連用Qの異同という問題を伝統的な国語学の文法論の立場に立って説明することから出発し、最近の非対格性の仮説などをも援用しながら連用Qの諸用法や分類を検討した後、連用Qの有するアスペクト限定の機能に目を向けることによって問題を動詞句一般(具体的に取り上げているのは移動動詞句が中心)の限界性へと発展させ、語彙概念構造の合成といった手法を使いながら、特に動詞句における限界性の変更の問題を分析したものであるが、全体を通して、理論に偏ることなく実際の言語使用をも丁寧に参照し、かつ、現在のアスペクト研究におけるアスペクトからアスペクチュアリティへといった研究の流れをも意識しつつ結論を導いているという点で高く評価される。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。